

英 語 科

今 野 怜
武 田 美 奈
鈴 木 孝 司

I 研究主題と英語科

1. 研究主題のとらえ方—教科の「目指す生徒像」

英語科では、研究主題及び1年次の実践を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、2年次の実践に取り組んできた。

【英語科の目指す生徒像】

外国語を通じて、主体的に人や社会と関わりをもち、場面や目的、相手に応じてより適切に伝え合う生徒

英語科は、外国語を通じて、コミュニケーション能力の基礎を養うことを目標とした教科である。その具現化のために、積極的に相手とコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と、「聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと」などの言語運用能力の育成は不可欠である。このことを踏まえ、本校では、外国語を通じて、相手に自分の考えを伝えたり、相手の考えを理解したりしながら、自ら挑戦したくなるような課題づくりを目指してきた。その過程で、運用できる言語能力に気付き、より適切に使いたいという態度が生まれ、繰り返し課題解決に挑んだりしながら、より適切に伝え合うための能力を相互作用的に育むことができると考える。「主体的に」とは、話し手と聞き手が互いをより深く知ろうとしたり、自他国の特色に関心を持ったり社会の諸問題に国際的な視点で関わろうとしたりすることである。「より適切に伝え合う」とは、例えば、相手に応じてより伝わりやすい語句を選択したり、状況に応じて使用すべき表現を選択したりすることや、相手の意向を十分に理解できるまで聞いたり、相手の考えを尊重した上で応答したりすることである。

2. 研究のあゆみ

この生徒像に迫るために、資質・能力が発揮されている姿を具体化し、次のように整理した。

【3年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視して育てる資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・考えを深めたり、より豊かに伝え合ったりするために、主体的に題材や他者と関わったり、それを基に表現したりしようとする力	・考えや思いを伝え合いたくなるような題材や活動の設定 ・深い内容を伝え合いたくなるような課題を設定することで、相手の情報を精査して聞き取ろうとする
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・既習事項を生活体験や自分の考えと結び付けて、相手の意向を理解したり、自分の伝えたいことを表現したりする力	・既習事項や題材をいかした、新出事項や題材の導入の工夫 ・既習の語句や表現も選択する必要がある言語活動の中で、繰り返し挑戦させる場の設定 ・相手の意向を正しく理解しているかを確認させる場の設定
場に応じて判断基準をつくる力	・場面や相手に適する内容やその場に応じた表現方法としてよりふさわしいものを判断しながら言語運用する力	・相手や目的を意識しながら、英文や伝え方を選択させるような言語活動の設定 ・選んだ表現や語句が、場面や相手にふさわしいものであるかを活動後に自分で振り返ったり、話し手が選択した表現の意図を確認させたりするような振り返り用紙の活用

学びを評価し、課題を見付ける力	・より質の高いコミュニケーションに向けて、これまでの言語使用場面や学習から、より適切な内容や表現方法を追究する力	・CAN-DO形式での評価 ・英語による表現の質の高まりや表現者の意向を理解していることを実感させたり、より適切な表現を模索させたりするための振り返り
-----------------	--	--

英語科では、前研究における課題として、相手の理解度を確認しながらやりとりをすることと、生徒自身が表現の手助けとして立ち返られるような振り返りの工夫をすることが挙げられた。そこで本研究では、「考えを深めたり、より豊かに伝え合ったりするために、主体的に題材や他者と関わること」「学びを振り返り、それを活用できる場を判断して表現すること」を重視する。

1年次は、英語で深く思考し、伝え合いたくなるような題材や学習活動の設定に重点を置いた。ALTの要望に応えたり、自分の学校生活に直接関わるような課題を設定したりすることで、仲間と英語で情報交換しようとする姿や、グループやペアで協同的に学ぼうとする姿など、主体的に課題解決しようとする姿が見られた。一方で、教科書の話題から離れたり、自分の生活体験から距離があったりする話題に対して、英語で思考・やりとりをすることが難しくなることがあった。さらに、相手の言ったことに対して反応できず、あいまいな理解のままやりとりを進める場面が見られた。そこで2年次は、学習課題や教科書の話題を、より生徒が身近に感じて学ぶことができるような課題提示と、主体的に聞く力を付けるための手立ての工夫に重点を置いて、ここまでの研究を進めてきた。また、題材を構想・具現化する際に、その時点で生徒の資質・能力がどれほど高まっており、さらに何をどれくらい引き出したいのかを第一に考えている。

3. 教科としての振り返り

実践を通しての成果(○)と課題(▲)は以下の通りである。

- 社会科と連携してディベート活動に取り組んだ。その結果、生徒が横断的にその議題に対して思考を深めることにつながった。社会科で深めた自身の考えや立論を英語で表現しようとするのが、話し手にとって、より深い内容を英語で伝える表現力を育み、聞き手にとって、相手の話から本当に重要な情報を精査して聞きとる力を育んだ。これまでは、話し手が自分の伝えたいことを英語で表現するための知識・技能や表現方法を育成することに重点を置いてきたが、よい聞き手を育てることが、話し手と聞き手の双方を高め合うことにつながるのではないかと感じた。
- 表現活動において、同じ話題について繰り返し挑戦させた結果、仲間の英語と比べたり、既習事項を再度確認したりしながら、より自分の伝えたいことを表現できる場面があった。
- ▲生徒を対象に行った授業アンケートより、学習している言語材料や話題が、実生活のどのような場面で生かせるか、役立ちそうかを実感できている生徒が多いことがわかった。特に、買い物や学校紹介など、実際に生徒が経験する可能性が高い課題において、生徒はより実感していた。一方で、教科書で扱った題材をきっかけに、生徒自身がより異文化への関心を持ったり、題材についてもっと知りたいという意欲を高めたりするための手立てが必要である。
- ▲生徒自身が、自分の選択した表現が適切であるのか、よりよい表現とはどのような表現を指すのか、判断基準をより明確にする必要があると感じた。授業の様子から、話し手と聞き手の双方が理解していればやりとりは成立するが、場面や目的に応じて、より適切な表現はないのか再思考し、表現を変えて再挑戦するという場面が少なかった。さらに、振り返りにおいて、生徒が自身の学びを自覚したり、変容を実感したりする記述が少なかったことから、判断基準が不明確であったことが言える。今後、課題解決の場においてつまづきを共有して適切な表現を確認したり、場面や目的に応じた判断基準を、生徒自身が自覚したりすることができるような課題提示が必要であると感じる。
- ▲聞く力を高めるために、相手の発話をメモさせたり、リピーティングさせたりした。その結果、聞き手意識は高まったが、聞く力が高まったことを実感させ、教師がどう見取るかが課題である。
- ▲授業アンケートから、生徒は読む力を高めることに意識が向いていないことがわかった。今後、読むことと他の技能を結び付けて、読む力を高める教師側の手立てが必要だと感じた。